接続詞の機能と必要性¹

北海道大学 伊藤俊一・阿部純一

Function and necessity of connectives

Toshikazu Ito and Jun-ichi Abe (*Department of Behavioral Science,
Faculty of Letters, Hokkaido University, Kita-ku, Sapporo 060*)

The present study aimed to clarify the function of 45 Japanese connectives and to examine the necessity of them in text-comprehension. Subjects were given sequences of two sentences and were asked to select connectives that were acceptable between the two sentences. Subjects were also required to rate the necessity of having connectives for each inter-sentential position. The “interchangeability” between each pair of the 45 connectives was calculated by counting the number of times that each pair was selected together for the same inter-sentential position. By using the cluster analysis based on the “interchangeability”, the connectives were classified into six clusters, i.e., “Anti-prediction”, “Confirmation”, “Causality”, “New-topic”, “Addition”, and “Disjunction”. There were some differences between our clusters and the traditional categories proposed by linguists. “Anti-prediction”, “Confirmation”, and “New-topic” were unique to our classification. Our classification seems to reflect more accurately the readers’ knowledge about the use of connectives, because connectives used in the same inter-sentential situation were classified in the nearer clusters. The necessity for connectives in “Anti-prediction” and “Causality” was rated high. Without these connectives, the inter-sentential situations may impose much information processing load on readers either by upsetting their prediction in the case of “Anti-prediction”, or by requiring them to search for large amount of ‘world knowledge’ in the case of “Causality”.

Key words: cognitive processes, psycholinguistics, reading comprehension, text structure, sentence comprehension, word meaning, connectives, taxonomies.

文章理解においては、読み手はそこに含まれる個々の文を関係づけ、文章全体としての意味を理解しなくてはならない。ある文が、その前に書かれている文、あるいは文群に対して持っている意味的な関係を、本研究では‘接続関係’と呼ぶことにする。そのような接続関係の認識がいかにしてなされるのかを解明することは、今日の文章理解研究ひいては言語理解研究にとって最も重要な課題の1つとなっている。

諸品詞の中でそうした接続関係の認識に直接的に影響すると思われる代表的なものは、接続詞である。多くの言語学者は、接続詞には後文が前文に対して持っている接続関係を読み手に予告する機能がある、と考えている(広瀬, 1984 など)。実際、適切な接続詞を文章中で使用すると文章の理解がそれだけ促進されることは、伊

藤・阿部(1988)によって実験的にも確認されている。

しかし、接続詞の機能についてこのような一般的な議論がありながらも、個々の接続詞を読むことによって読み手がどのようにして、どのような接続関係を、どの程度認識するのかということについてはまだほとんど解明されていない。例えば、従来から試みられている、接続詞を接続関係の類型と対応づけて分類しようとする諸研究の多くも、たとえその過程において数多くの文章例が集められ、分析されていたとしても、最終的には主に研究者の言語学的直観に頼っているのが現状であり、その分類の妥当性についての客観的な検討、あるいは、個々の接続詞が文章理解において果たしている役割についての詳細な考察などについてもまだ不十分な点が多い。そのような現状を踏まえ、本研究では、接続詞の接続機能と必要性について、実験的な手法に基づく分析と考察を進めてみたいと思う。

以下に、本研究の目的をより具体的に述べる。第一の目的は、接続詞を経験的データをもとに分類することによって、それぞれの接続詞が持つ機能的な性質について考察を行なうことである。ある文間に挿入することがで

¹ 本研究は、阿部純一に対して与えられた昭和62年度文部省科学研究費(特定研究(2), 課題番号62210001), 昭和63年度同費(一般研究(C), 課題番号63510038), 昭和63年度稲盛財団助成金, および、阿部が分担者となっている昭和63年度文部省科学研究費(特定研究(1), 課題番号63101002, 研究代表者藤崎博也)の補助を受けた。

きる接続詞が複数個存在する場合、それら複数個の接続詞は、その文間において‘可換性’があるといえる。その可換性は、多くの場合、それらの接続詞が、その文間で同種の役割を果たしていることを示していると考えられる。このことから、十分に多くの文章(文間)状況を設定し、接続詞どうしの可換性を測ることにより、接続詞間の機能的類似性が求められると考えられる。こうした考えに基づき、本研究では、接続詞の機能的な観点からの分類を試み、その分類をもとに、各種の接続詞が文章中のどのような場面で用いられるのか、また、それらが読み手の接続関係の理解にどのような役割を果たしているのかについて考察してみたいと思う。

また、本研究の第二の目的は、接続詞の必要性の程度を実験的に調べることによって、各種の接続詞が読み手による文間の関係づけにどの程度貢献しているのかについて考察することである。

方 法

被験者 北海道大学の学部学生 30 名であった。

材料 45 ページからなる小冊子が、各被験者に 1 部ずつ用意された。小冊子の各ページには、1) 連続した 2 文からなる‘文章’、2) その 2 文の間に接続詞が必要とされるかどうかを評定するための 7 段階評定スケール、3) 接続詞 45 個が列挙されている接続詞リスト、がこの順序で印字されている。

1) の連続した 2 文からなる文章は、以下の方法で選定された。まず、[国立国語研究所報告 48——電子計算機による新聞の語彙調査 (IV)——] (1973) の語彙頻度表をもとに、接続詞が使用頻度の高い順に 60 種選ばれた。その際、ある語が接続詞であるか否かの認定には青木(1973)が参考にされた。続いて、中学生・高校生用の国語の教科書、新聞などの刊行物から、それらの接続詞が使用されている箇所が、各接続詞につき 2 箇所ずつ検索された。その際、45 種の接続詞 (Fig. 1 参照) については、それらが使用されている箇所を 2 箇所見つけることができたが、残る 15 種については見つけることができなかった。使用されている箇所を 2 箇所見つけることができなかった接続詞は以下の 15 種である(五十音順)。

おまけに、かえって、かくして、こうして、このうち、そのほか、そもそも、だからこそ、ちなみに、ともあれ、のみならず、ひいては、または、もしくは、よって。

使用されている箇所が 2 箇所見つかった 45 種の接続詞のそれぞれについて、その接続詞の前にある 1 文とその接続詞を含む 1 文が抜粋され、2 文からなる‘文章’とされた。このようにして、45 種の接続詞それぞれにつき 2 種類、計 90 種の‘原文章’(2 文の連続)が選ばれた。原文章からは、2 文の間に存在していた接続詞が取り去られ、代わりに、もともと接続詞があった箇所、つ

まり第 2 文の文頭にアンダーラインが引かれた。

被験者に配布される小冊子の各ページには、45 種の各接続詞に対して用意された 2 種類の文章のうちどちらか 1 つが記されていた。つまり、各被験者に与えられた文章は 45 種で、それらの文章はすべて原文章では互いに異なる接続詞を持っていたことになる。各小冊子に、原文章で同じ接続詞を持っていた 2 種類の文章のうちのどちらが記されるかは、接続詞ごとにランダムに、しかし被験者間では同数となるように定められた。すなわち、90 種の文章のそれぞれにつき 15 名の被験者が割り当てられたわけである。なお、小冊子における 45 種の文章の呈示順序(ページ順序)は被験者ごとにランダムにされた。

3) の接続詞リストには 45 種の接続詞が列挙された。それらは、1) の文章の原文章に含まれていた 45 種の接続詞である。リストにおいては、これらの接続詞は横 5 個×縦 9 個に配置された。接続詞の並び順が作業に影響することがないように、5 種類のランダムな並び順のリストが用意され、それぞれ同数の被験者に与えられた。

手続き 被験者は数人ずつ実験に参加する。被験者は 1 人 1 冊ずつ小冊子を与えられ、ページごとに、以下の作業を行う。はじめに、1) 文章(2 文の連続)を読解する。その第 2 文の文頭にはアンダーラインの引かれた空所がある。次に、2) その 2 文の間に接続詞を使用することがどの程度必要と感じられるかを、‘不必要’を 1、‘必要’を 7 とする 7 段階のスケール上で評定する。続いて、3) 文章の下に列挙された接続詞 45 種の中から、第 2 文の文頭(アンダーラインの部分)に入れることが適切であると思われる接続詞を選んで丸印をつける。この作業において、印をつける接続詞の数は制限されない。

被験者は、必ず小冊子のページ順どりに作業を行なうように、また、各ページにおいて、必ず上記の順序で作業を行なうように教示される。すなわち、ふさわしい接続詞をリストから選んだ後で必要性を評定する、などのことは許されない。

作業はすべて被験者の自由なペースで行なわれる。

結 果

接続詞の選択反応の分析

45 種の接続詞のそれぞれの総選択数にはかなりの広がりが見られた。最も選択されることが少なかった接続詞は“たとえば”で総選択数は 29、最も多く選択された接続詞は“しかし”で総選択数は 283 であった。全ての被験者が与えられた全ての文章に対して原文章どりの接続詞のみを選択したなら、各接続詞の総選択数は 30 になるはずであった。こうした総選択数の広がりの原因としては、多種の接続詞と交換可能な接続詞ほど多く選択された、ということが挙げられる。すなわち、それ

それぞれの接続詞の総選択数と、そのそれぞれの接続詞とともに選択された接続詞の種類数との間には有意な正の相関 ($r=.33$, $t(43)=2.31$, $p<.05$) が認められた (ただし、それぞれの接続詞とともに選択された反応数が3に満たない接続詞は種類数に加算されなかった)。接続詞の間で選択数に広がりが見られた原因としては、他に、各接続詞の一般的使用頻度の違いが影響したということも考

えられるが、本研究では、そのような使用頻度の影響は認められなかった。すなわち、各接続詞の総選択数と一般的使用頻度 ([国立国語研究所報告 48—電子計算機による新聞の語彙調査 (IV)—] (1973) の語彙頻度表における頻度) との間に有意な相関はなかった ($r=.01$, $t(43)=.05$)。なお、各被験者の各文章に対する接続詞の平均反応数は 4.1 であった。

Fig. 1. 接続詞の‘可換度’に基づくクラスター分析結果と各接続詞の必要性評定値。

接続詞の‘可換度’に基づく分類

接続詞の分類分析に際しては、各被験者の各文章に対する反応の中で複数個の接続詞が選ばれた反応のみを対象とした。本研究では 90 種の文章のそれぞれに対し被験者 15 名が割り当てられたので、合計 1350 の反応が得られたわけであるが、そのうち、複数個の接続詞が選ばれた反応は 1053 (78.0%) であり、これらの反応が下記の分析の対象となった。

接続詞の分類分析には以下の方法を用いた。まず、全 45 種の接続詞から作ることが可能なすべての接続詞対のそれぞれについて、以下の計算式で表わされる‘可換度’を算出した。

$$I(a, b) = \{C(a, b)/F(a) + C(a, b)/F(b)\} / 2$$

ここで、それぞれの記号は次の数値を表わす。

$I(a, b)$: (Interchangeability) 接続詞 a と接続詞 b の可換度。

$C(a, b)$: (Cooccurrence) 接続詞 a と接続詞 b がともに同一の文章に対して選ばれた反応数。

$F(a)$: (Frequency a) 接続詞 a が選ばれた全反応数。

$F(b)$: (Frequency b) 接続詞 b が選ばれた全反応数。

この可換度に基づいて、接続詞の分類を試みた。分析には 4 種のクラスター分析法 (Average linkage method, McQuitty's similarity analysis, Median method, Ward's minimum variance method) を用いた。その結果、いずれの手法においてもほぼ同じクラスター構造が得られたので、ここでは Ward's minimum variance method で得られたクラスター構造をもとに考察を行なうことにする。

得られたクラスター構造を Fig. 1 に示す。

本研究では Fig. 1 に示した 6 つのクラスター (クラスター A からクラスター F までの 6 つ) を基本的なクラスターと見なし、各クラスター内に存在するさらに下位のクラスターについては考察の中で個々に言及することにする。

接続詞の必要性評価反応の分析

各文章に対する接続詞の必要性の評価値を接続詞ごとに平均し、その値を各接続詞の‘必要度’とした。各接続詞の必要度を Fig. 1 に示す。上記の 6 つのクラスター間の必要度の差は有意であった ($F(5, 39) = 13.93, p < .01$)。また、各クラスター対間の必要度の差を分析した結果は以下の通りであった。クラスター A は他のすべてのクラスターと差が有意であった (クラスター B, C, D, E, F とそれぞれ $t(15) = 8.81, t(19) = 5.66, t(15) = 7.07, t(19) = 7.22, t(11) = 5.04$, すべて $p < .01$)。クラスター C はクラスター F 以外のすべてのクラスターと差が有意であった (クラスター B, D, E とそれぞれ $t(14) = 4.01, t(14) = 3.73, t(18) = 3.04$, すべて $p < .01$)。これら以外のクラスター対の間には有意な差は見られなかった。これ

らのことから、クラスター A とクラスター C の必要度が他のクラスターに比べて高く、とりわけクラスター A の必要度が高かったことがわかる。

考 察

接続詞の分類

前述したように、クラスター分析の結果に基づいて、対象とした 45 種の接続詞は 6 つのクラスターに分類されるものとした (Fig. 1 参照)。Fig. 1 の分類結果を、過去の国語研究における伝統的な接続関係の類型と対応づけて考察するため、佐久間 (1983) の表 (p. 41) を参考にした。そこでは、文の接続関係の一般的な類型として、[順接型]、[逆接型]、[累加型]、[対比型]、[転換型]、[同列型]、[補足型]、[連鎖型] が挙げられている。佐久間が表中で引用している永野 (1972) などに列挙されている各類型に対応する接続詞例を参考にして、本研究で対象とする 45 種の接続詞を伝統的な類型に対応させたものを、Fig. 1 中に示してある。なお、[連鎖型] は、“他の 7 類型と異なり、接続語句の想定が比較的しにくい” (佐久間, 1983, p. 42) とされている。本研究で対象とする接続詞にも [連鎖型] と特定できるものは見られなかった。また、本研究で対象とする接続詞のうち “とにかく” と “むしろ” は伝統的な類型のどれに対応づけるべきなのか推測することができなかった。

以下、各クラスターの接続詞が持つと考えられる機能的な性質について、個々に考察することにする。

クラスター A (反予想型) Fig. 1 のクラスター A は 11 種の接続詞からなっており、これらは、さらに 2 つの下位クラスター、つまり、“もっとも”、“ただし”、“ただ” からなるクラスターと、“それなのに”、“それでも”、“でも”、“だけど”、“ところが”、“だが”、“しかし”、“けれども” からなるクラスターに分かれる。

このうち、後者のクラスターの接続詞は、伝統的分類における [逆接型] の接続詞に対応する。つまり、前文で述べた事柄や、そこから当然予想されることと相反する事柄を後文で述べるという接続関係が存在するときに使用される接続詞である。

前者のクラスターをなす “もっとも”、“ただし”、“ただ” は、伝統的分類において “なぜなら” などとともに [補足型] の接続詞として位置づけられている。しかし、本研究では、上記のように、これらの接続詞は、むしろ、従来の分類における [逆接型] の接続詞と機能的に類似性が高いとみなし得る結果が得られた。これら 3 種の接続詞は、前文で述べられた事柄に対して、後文で制限が加えられることを示す接続詞であり、このような性質は、[逆接型] の接続詞が持つ性質に近いと考えられる。すなわち、読み手は、文章読解中のある時点で既に

読み終えている部分を既知の事柄としてとらえ、それを前提として後にく文を読むため (Abe, 1982), その前提となる前文の内容に後から制限が加えられるという事態は読み手の予想に反するものであると考えられるわけである。

このように、このクラスターに属する接続詞は、すべて反予想性という共通の性質を持つと考えられるので、このクラスターを新たな接続詞カテゴリーとして[反予想型]と名づけた。

伊藤・阿部(1988)が行なった、文頭に接続詞を持つ文の再生課題を含む実験では、“ただし”、“ただ”を持つ文の再生で、多くの被験者の反応において、実際には提示されなかった[逆接型]の接続詞(“しかし”など)が自発的に記入されるという傾向が見られた。このことから、伝統的分類における[逆接型]の接続詞と“ただし”、“ただ”などの[補足型]の接続詞が機能的に近い関係にあり、ある場合においては区別されずに用いられるということがわかる。

クラスター B (確認型) クラスター B に含まれる接続詞 6 種のうち、“ようするに”、“つまり”、“すなわち”は、伝統的分類における[同列型]の接続詞に対応する。これらの接続詞は、後文で、前文で述べた事柄の言い換え、または要約をする場合に用いられる接続詞である。これらの接続詞の他に、“たとえば”も伝統的に[同列型]として位置づけられているが、本研究では、“たとえば”は、クラスター B ではなくクラスター D に含まれるという結果が得られた。

“ようするに”、“つまり”、“すなわち”とともに下位のクラスターをなす“むしろ”は、必ずしもそれらの接続詞と同様の接続関係にのみ用いられるとは限らないが、[それは A ではない、むしろ、B というべきだ。]のように、後文で前文の言い換えを行なう際に用いる場合があり、そのような場合にそれらの接続詞との可換性が生じてくるのであろう。

クラスター B の中で、“なぜなら”と“とにかく”がもう 1 つの下位クラスターを形成している。“なぜなら”は、前文で述べられた事柄の理由づけを後文で行なう場合に用いられる接続詞で、伝統的には[補足型]の接続詞として位置づけられている。“とにかく”は、それまで述べたことを総括して、結論を述べる場合に用いられる。これらの接続詞に共通するのは、後文が前文で述べられた事柄に対する読み手の理解をさらに深めるための情報を提供するという接続関係において用いられるという点であると考えられる。

後文が前文の理解をより確かなものとすることを目的として記述されているという性質は、後文で再び前文を説明する“ようするに”、“つまり”、“すなわち”にも共通する性質であると考えられる。そこで、クラス

ター B に属する接続詞群を、新たなカテゴリーとして[確認型]と名づけた。

クラスター C (順接型) クラスター C に属する 10 種の接続詞はすべて、伝統的分類でいう[順接型]の接続詞に対応する。クラスター C は、さらに 3 つの下位クラスター、すなわち、“それで”、“そこで”からなるクラスター、“ですから”、“だから”、“それだけに”、“それゆえ”、“そのため”、“したがって”からなるクラスター、“そのうち”、“すると”からなるクラスターに分かれる。

“それで”、“そこで”は、前文で解決すべき問題状況が提示され、後文ではそれに対処するために生じる行為者の意図的な行為が記述されるという接続関係に対して用いられる。

“ですから”、“だから”、“それだけに”、“それゆえ”、“そのため”、“したがって”は、後文で述べられる事柄が、前文で述べられた事柄に対して因果的、または論理的な必然性を持って生じる場合に用いられる。

“そのうち”、“すると”がもう 1 つの下位クラスターをなす。“そのうち”は、前文と後文との間に時間的な推移が存在している場合に用いられる。また、“すると”は、前文で述べられた事柄の直後にそれに呼応するように後文で述べられる事柄が生じるという関係で用いられる。これらの関係は、前述の 8 種の接続詞によって示される関係に比べると、後文の事柄が前文の事柄から必然的に導かれるという性質が弱い。“すると”と前述の 2 つの下位クラスターに含まれる接続詞の違いについて、相原(1987)は、“‘だから’‘それで’‘そこで’などは、接続助詞、ソ系の指示語などを主体として形成された語であるから、承前性が強い。そのため…先行文と後続文の間に転換性の認められるような接続には使にくいのであろう。‘すると’は動詞の終止形を主体として形成された語であるから承前性よりも断止性が強い。”(p. 42) という指摘を行なっている。

クラスター D (新話題型) クラスター D に含まれる 6 種の接続詞のうち、“では”、“それでは”、“ところで”、“さて”は、伝統的分類における[転換型]の接続詞に対応する。つまり、前文で述べられた話題を打ち切り、後文で新たな話題を導入するという接続関係で用いられる接続詞である。

“では”、“それでは”と“ところで”、“さて”は、それぞれ別々に下位クラスターを形成している。“ところで”、“さて”の使用においては、多くの場合、後文ですぐに新たな話題を導入することが可能であるのに対し、“では”、“それでは”の使用においては、一般に後文で話題の転換が生じることを文中でさらに明示する必要があると考えられる。例えば、[では、続いて…の話でしょう。]のようにである。

また、“では”、“それでは”は、[転換型]の接続関係のほかに、[順接型]に近い接続関係において用いられる場合がある。“それなら”という[順接型]と考えられる接続詞が、これらの接続詞とともに下位クラスターを形成しているのはそのためであろう。

“たとえば”は、後文で前文で述べられた事柄の例を提示するという接続関係において用いられる接続詞であり、このような性質は、むしろクラスター B に見られる後文が前文の理解を促すという関係と共通しているように考えられる。伝統的分類においても、“たとえば”は[同列型]の接続詞として位置づけられている。それにもかかわらず、“たとえば”が[転換型]の接続詞とともにクラスター D に含まれる結果となったのは次のような理由が考えられる。“たとえば”は、後文が前文の例示の役割を果たす場合に用いられるわけであるが、例示においては、一般に、前文で述べられた事柄を説明するために、新しい話題が導入される。そのような場合に、新たに導入された話題を前文の例示としてとらえるなら“たとえば”を挿入するのが適切になるが、2つの異なる話題の並置ととらえるなら[転換型]の接続詞が適切なものとなる。つまり、後文での新たな話題の導入という共通の性質のために、“たとえば”と[転換型]の接続詞の可換性が高くなったのであろう。

このクラスターの接続詞は、“それなら”を除いて、後文で新しい話題を導入するという点で共通するので、新たなカテゴリーとして[新話題型]と名づけた。

クラスター E (累加型) クラスター E に含まれる 10 種の接続詞は、伝統的分類における[累加型]の接続詞に対応する。下位クラスターとして、3つのクラスター、つまり、“つぎに”、“それから”、“そして”からなるクラスター、“しかも”、“そのうえ”、“さらに”からなるクラスター、“なお”、“また”、“それに”、“いっぽう”からなるクラスターがある。

このうち“つぎに”、“それから”、“そして”からなるクラスターは、時間的、あるいは空間的な順序関係に従って叙述がなされていることを示す接続詞である。

“しかも”、“そのうえ”、“さらに”からなるクラスターは、後文で述べられる事柄が、前文で述べられた事柄と同種のものではあるが、その程度がさらに増しているという接続関係で用いられる接続詞である。

“なお”、“また”、“それに”、“いっぽう”からなるクラスターは、主に、後文で述べられる事柄が、前文で述べられた事柄とは場面・視点などが異なるものである場合に用いられる接続詞である。このような性質は、伝統的分類における[転換型]の接続詞が持つ性質と類似したものであるとも考えられるが、これらの接続詞がいわゆる[転換型]の接続詞と異なっているのは、[転換型]の接続詞を用いると全く関係のない話題でも後文で導入

することができるのに対し、これらの接続詞を使用する際には、前後の文に話題の共通性が必要であるという点であると考えられる。

クラスター F (対比型) クラスター F をなす 2 種の接続詞“それとも”と“あるいは”は、伝統的分類における[対比型]の接続詞に対応する。これらは、前文で述べられた 1 つの可能性に対して、後文で別の可能性の存在を示唆する場合に用いられる。

接続詞の必要性

本研究では、クラスター A ([反予想型])とクラスター C ([順接型])において接続詞の必要性が高く評価された。

[反予想型]の接続関係において接続詞の必要性が高い理由としては、以下のことが考えられる。[反予想型]の接続関係は、前文で述べられた事柄と相反する事柄や、前文で述べられた事柄に制限を加えるような事柄が後文で述べられるという性質を持つ。読み手は前文で述べられたことを前提として後文を理解しようとする傾向がある(Abe, 1982) ため、文章中でこのような接続関係が現われるというのは読み手の持つ予想を大きく裏切ることになる。そのため、文間の関係づけは困難となるであろう。そのような状況においては、後文で予想に反する事柄が述べられることを接続詞によって予告することが必要とされ、また、そうすることによって文間の意味の関係づけ処理が容易になる、ということであろう。

一方、[順接型]の接続関係において接続詞の必要性が高い理由としては、この接続関係を認識する際に用いられる知識の検索に大きな処理負担がかかるという可能性が考えられる。つまり、[順接型]の接続関係を理解するためには、例えば[A という事柄が生じた場合には、続いて B という事柄が生じることが予想される]というような世界に関する一般の知識が文章を読む際に想起されることが必要であるが、そのような世界知識は膨大なものであり、その中から必要な情報を検索するのに大きな処理負担がかかるのではないかと、ということである。そのような場合に、接続詞によって接続関係があらかじめ明示されると、読み手は、それを手がかりとすることによって、速やかで無駄のない知識の検索を行なうことができる可能性がでてくる。

それらに比べて、他のクラスター([確認型]、[新話題型]、[累加型]、[対比型])の接続詞の必要性が低く評定された。[新話題型]と[累加型]の接続関係は、どちらも同種の情報の並置あるいは付け加えという比較的単純な関係であり、そのため、読み手にあまり大きな負担をかけることはなく、接続詞がなくても理解の妨げにはならないであろう。また、[確認型]、[対比型]においては、接続詞と関連して後文の文末の形式が一定の形に限定されるものが多い。例えば、“なぜなら”([確認型])の場合

には、文末に「...だからである」という形式が多く使われる。また、“それとも”(対比型)の場合には、前文の文末と同一の形式が後文の文末にも使われることが多い。このように、文末の形式が文頭で使用され得る接続詞と対応しているため、文頭に接続詞がなくても、文末の形式から接続関係が明らかである場合が多い。このような理由から、これらの接続詞の必要性は、[反予想型]、[順接型]に比べて低いという結果が得られたものと考えられる。

一般的考察

本研究の結果には、伝統的分類と違う点がいくつか見られた。個々の違いについては“考察”の中で随時言及してきたが、ここでは、なぜこのような違いが生じたかについてもう少し一般的な考察を進めておきたいと思う。

本研究では、多種の文間を用意し、それぞれの文間に対して使用できる接続詞を多人数の被験者に選ばせるという方法を用いた。このような方法を用いたことにより、最終的には研究者の言語学的直観に頼る従来の方法に比べると、読み手が心内に備えているであろう、接続詞の‘使用に関する知識’をよりよく反映する分類が可能になったと考えられる。例えば、伝統的分類では[補足型]という1つの類型に分類されている[“もっとも”、“ただし”、“ただ”]と[“なぜなら”]が、実際には同じ文間で使用される場合は少ない、ということが本研究の結果から示唆された。このように、伝統的分類には、所々に、どの接続詞とどの接続詞が同じ文間で使用できるのかという、接続詞の使用上の現実にそぐわない類型が見られ、このことが、本研究の分類との違いをもたらす大きな原因になったのではないかと推察される。すなわち、本研究の結果の方が、‘実際の使用上の類似性’をより直接的に反映した妥当な分類ではないかということである。(もちろん、本研究で同じ類型に分類された接続詞が、全く同じ機能を持つということではない。可換性が非常に高い接続詞対においても、どちらの接続詞が使用されるかによって、読み手の受ける印象は微妙に異なるであろう。このような微妙な差異をもたらす要因を見極めることは今後の課題といえるであろう。)

先に、読み手は接続詞を読むことによって後文のある程度予期することができるという考えを示した。その予期は、接続詞使用に関する知識を用いてなされると考えられる。本研究の分類結果はそのような知識を反映していると考えられるため、結果の中で近い関係に位置づけられている接続詞の間では、それらの接続詞によって読み手が行なうであろう予期もまた類似している可能性が充分にある。こう考えると、本研究の結果が、人間の文章理解の内的実行過程を解明していこうとする今後の研

究の上で、より有用な知見として役立つ可能性も期待できるであろう。

もっとも、本研究で設定した‘文脈’は、わずか2文の間の状況でしかなく、文群と文群の間あるいは段落と段落の間などを関係づける接続詞の使用状況をも把握できるほどに幅広いものではない。また、調べられた具体的文脈例の数も決して多いとはいえない。このような点を考慮にいれるならば、あくまでも、こうしたアプローチによる現段階での成果と見なしておくのが妥当なところかもしれない。

本研究では、また、[反予想型]と[順接型]の接続詞が特に高い必要性をもつという結果が得られた。伝統的分類における[逆接型](本研究では[反予想型]の一部となっている)の接続詞の必要性が高いということは、過去、多くの研究者によって指摘されていることである(例えば、安井・熊谷・井上(1985)など)。また、伊藤・阿部(1988)の実験では、“しかし”、“ただし”など[反予想型]の接続詞、あるいは“したがって”、“だから”など[順接型]の接続詞を持つ文章においては、その接続詞を取り去ることによって理解が阻害される傾向が強いという結果が得られている。これらの先行研究や本研究の結果によって、[反予想型]、[順接型]の接続詞が文章理解において特に重要な役割を果たしていることは、現象的にはほぼ確認されたといえる。

本研究では、文章理解に関与する様々な現象の中で、問題を接続詞の機能という側面のみに絞って考察を進めてきた。しかし、実際には、読み手は多くの文間の接続関係を接続詞がなくても認識できる。また、個々の接続詞によってなされる大まかな接続関係の認識だけで、文章理解に十分な情報が得られるとは考えられない。文間の接続関係の認識に働く諸要因、諸手がかりを、それらと接続詞との関係に気を配りながらも、さらに包括的に探究することが当面の具体的な課題であるといえるであろう。

引用文献

- Abe, J. 1982 Schema representation of “Speaker-world” in natural language processing. In R. Trappl (Ed.), *Cybernetics and systems research*. Amsterdam: North-Holland. Pp. 885-890.
- 相原林司 1987 接続語句と文章の展開 日本語学, 6, 37-45.
- 青木伶子 1973 接続詞および接続詞の語彙一覧 鈴木一彦・林巨樹(編) 品詞別日本文法講座 6 接続詞・感動詞 明治書院 Pp. 210-253.
- 広瀬正宜 1984 文章における連接式形について 井上和子(編) 昭和58年度文部省科学研究費補助金(特定研究1) 報告書「明確で論理的な日本語の表現(中間報告)」, 49-58.

- 伊藤俊一・阿部純一 1988 文章理解における接続詞の働き 心理学研究, 59, 241-247.
- 国立国語研究所 1973 国立国語研究所報告 48——電子計算機による新聞の語彙調査 (IV)——
- 永野 賢 1972 文章論詳説 朝倉書店
- 佐久間まゆみ 1983 文の連接——現代文の解釈文法と連文論—— 日本語学, 2, 33-44.
- 安井美代子・熊谷滋子・井上和子 1985 談話における文構造の働き 井上和子(編) 昭和 59 年度文部省科学研究費補助金(特別研究 1) 報告書「明確で論理的な日本語の表現(最終報告)」, 5-27.
- 1989. 11. 13. 受稿, 1991. 7. 13. 受理——